

森の紫陽花

泉鏡花

青空文庫

千駄木せんだぎの森もりの夏なつぞ晝ひるも暗くらき。此處こゝの森もり敢あへて深ふかしといふにはあら
 ねど、おしまはし、周圍しゅうゐを樹林きばやしにて取巻とりまきたれば、不動坂ふどうざか、
 團子坂だんござか、巢鴨すがもなどに縱横たてよこに通つうずる蜘蛛手くもての路みちは、恰あたかも黄昏たそがれ
こぶかに樹深やまぢき山路たどを辿ごとるが如ごとし。尤もつとも小石川こいしかは白山はくさんの上うへ、追分おひわけ
 あたりより、一圓いちゑんの高臺たかだいなれども、射いる日ひの光薄ひかりすければ小雨こさめ
 のあとも路みちは乾かわかず。此この奥おくに住すめる人ひとの使つかへる婢をんな、やつちや場ば
あをものかに青物あをもの買かひに出いづるに、いつも高足たかあし駄穿だはきて、なほ爪つまさき先さきを
よご汚よごすぬかるみの、特ことに水溜みづたまりには、蛭ひるも泳およぐらんと氣味きみ悪わるきに、
たゞひとへもり唯一ひと重森とほを出いづれば、吹通ふきとほしの風砂かぜすなを捲まきて、雪駄せつたちやらく
ひとと人ひとの通とほる、此方こなたは裾端折すそはしをりの然しかも穿物はきものの泥どろ、二にの字じならぬ奥お

くやまずみ^{あしあと} 山住の足痕を、白晝^{はくちう}に印^{いん}するが極悪^{きまわる}しなど歎^{かこ}つ。

嘗^{かつ}て雨^{あめ}のふる夜^よ、其^その人^{ひと}の家^{いへ}より辭^じして我家^{わがや}に歸^{かへ}ることありし

に、固^{もと}より親^{おや}いませず、いろと提^{ちやうちん}灯^{あかり}は持^もたぬ身^みの、藪^{やぶ}の前^{まへ}、

祠^{ほこら}のうしろ、左右^{さいはたけ}畑^{なか}の中^{ひろ}を拾^{ひろ}ひて、蛇^{じや}の目^めの傘^{から}脊^{かせ}筋^{すぢ}さがりに引^{ひつ}か

つぎたるほどこそよけれ、たかひくの路^{みち}の、ともすれば、ぬかる

みの撥^{はね}ひやりとして、然^さらぬだに我^わが心^{こころ}覺^{おぼ}束^{つか}なきを、やがて追^お

分^{ひわけ}の方^{かた}に出^{いで}んとして、森^{もり}の下^{した}に入る^いよとすれば呀^や、眞^ま暗^{くら}三^{さん}

寶^う黒^{あやめ}白^わも分^わかかず。今^{いま}までは、春^{はる}雨^{さめ}に、春^{はる}雨^{さめ}にしよぼと濡^ぬれ

たもよいものを、夏^{なつ}はなほと、はらくはらと降^ふりかゝるを、我^{われ}

ながらサテ情^{なさけ}知^しり顔^{がほ}の袖^{そで}にうけて、綽^{しやく}々^くとして餘^よ裕^{ゆう}ありし

傘^{から}ととも肩^{かた}をすぼめ、泳^{およ}ぐやうなる姿^{すがた}して、右^め手^てを探^{さぐ}れば、竹^た

垣けがきの濡ぬれたるが、するくくと手てに觸さはる。左手ゆんでを傘かさの柄えにて探さぐりながら、顔かほばかり前まへに出だせば、此この折をりぞ、風かぜも遮さへぎられて激はげしくは當あたらぬ空そらに、蜘蛛くもの巢すの頬ほにかゝるも侘わびしかりしが、然さばかり降ふるとも覺おぼえざりしに、兎とかうして樹こたち立たちに出いづれば、町まちの方は車かたしやぢ軸くを流ながす雨あめなりき。

蚊かやり遣けむりの煙けむり古井戸ふるいどのあたりを籠こむる、友ともの家いへの縁えんばた端たに罷まかり來きて、地切ぢぎりの強煙草つよたばこを吹ふかす植木屋うゑきやは、年久としひさしく此この森もりに住すめりとて、初冬はつふゆにもなれば、汽車きしやの音おととゞろたえまこがらしふ、時雨しぐれく來くるをりくごに、狐狸きつねの今いまも鳴なくとぞいふなる。然さもあるべし、但狸ただぬきの聲こゑは、老夫をぢが耳みみに蚯蚓みづずに似にたりや。

件くだんの古井戸ふるいどは、先住せんぢうの家いへの妻つまものに狂くるふことありて其處そこに空むな

しくなりぬとぞ。朽ちたる蓋犇々として大いなる石のおもしを
 置いたり。友は心強にして、小夜の螢の光明るく、梅の切株に
 滑かなる青苔の露を照して、衝と消えて、背戸の藪にさらく
 とものの歩行く氣勢するをも恐れねど、我は彼の雨の夜を惱みし
 時、朽木の燃ゆる、はた板戸洩る遠灯、畦行く小提灯の影
 ひとつ認めざりしこそ幸なりけれ。思へば臆病の、目を塞いで
 や歩行きけん、降りし音は徑を挟む梢にざツとかぶさる中に、
 取つて食はうと梟が鳴きぬ。

忪くは森のおどろくしき姿のみ、大方の風情はこれに越え
 て、朝夕の趣言ひ知らずめでたき由。

曙は知らず、黄昏に此の森の中辿ることありしが、幹に葉に

あかね ゆふひみすぢよすぢ こすゑ うすものもや
 茜さす夕日三筋四筋、梢には羅の靄を籠めて、
 なすばたけ
 茄子畑の根は暗
 く、其の花も小さき實となりつ。

たな かく
 棚して架るとにもあらず、夕顔のつる西家の廂を這ひ、
 烏
 瓜の花ほの／＼と東家の垣に霧を吐きぬ。強ひて我句を求む
 るにはあらず、藪には鶯の音を入れる、時ぞ。

ひ しげ なか
 日は茂れる中より暮れ初めて、小暗きわたり蚊柱は家なき處
 に立てり。袂すゞしき深みどりの樹蔭を行く身には、あはれ小
 きものども打群れてもの言ひかはすわと、それも風情かな。分け
 て見詰むるばかり、現に見ゆるまで美しきは紫陽花なり。其の淺
 さぎ
 葱なる、淺みどりなる、薄き濃き紫なる、中には紅淡き紅つけた
 る、額といふとぞ。夏は然ることながら此の邊分けて多し。明き

より暗きくらに入る處い、暗きより明きあかるに出づる處い、石いしに添そひ、竹たけに添そひ、籬まがきに立ち、戸とにイたゞず、馬蘭ばらんの中のなか、古井ふるゐの傍わきに、紫むらさきの俤おかげなきはあらず。寂じやくたる森もりの中深なかふかく、もうくと牛うしの聲こゑして、沼ぬまとも覺おぼしき泥どろの中に、埒らちもこはれ／＼牛養しやしなへる庭にはにさへ紫陽花あぢさゐの花盛ほかりなり。

このとき、白襟しろえりの衣紋えもん正ただしく、濃こいお納戸なんどの單衣ひとへき着て、紺地こんぢの帯胸おびなつか高たかう、高島田たかしまだの品ひんよきに、銀ぎんの平打ひらうちの笄かうがいのみ、唯黒たゞくろ髪かみの中なかに淡あはくかざしたるが、手車てぐるまと見みえたり、小豆色あづきいろの膝ひざかけして、屈くつきやう、竟わかもなる壯わかも伎ものぐ具ぐしたるが、車くるまの輪わも緩ゆるやかに、彼かの蜘蛛手くもての森もりの下道したみちを、訪とふ人ひとの家いへを尋たづね悩なやみつと覺おぼしく、此處こゝ彼處かしこ、紫陽花あぢさゐ咲あけりと見みる處ところ、必かならず、一時ひとときばかりの間に六度七あひだむたびな

度出ゝたひいであひぬ。實げに我われも其日そのひはじめて訪とひ到いたれる友ともの家いへを尋たづねあぐみしなりけり。

玉たま簾すだれの中なかもれ出いでたらんばかりの女をんなの倂おかけ、顔かほの色いろ白しろきも衣きぬの好このみも、紫陽花あぢさゐの色いろに照てり榮はえつ。蹴けこ込みの敷毛しきげ燃もえ立たつばかり、ひらくくと夕ゆふ風かぜに徇さまよ行まよへる状さまよ、何處いづこ、いづこ、夕ゆふ顔がほの宿やどやおとなふらん。

笛ふえの音ねも聞きこえずや、あはれ此このあたりわかに若わかき詩人しじんや住すめる、うつくしき學士がくしやあると、折をりからの森もりの星ほしのゆかしかりしを、今いまも忘わすれず。さればゆかしさに、敢あへて岡をか焼やきをせずして記きをつくる。

明治三十四年八月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

入力：門田裕志

校正：鈴木厚司

2003年5月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

森の紫陽花

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>